教職研究　第 13 号（2022）　pp.68-74

授 業 記 録

「キャリア」と向き合う

荒井　英治郎（信州大学学術研究院総合人間科学系）

１．はじめに

本稿は、2021 年度に開講した教職科目（選択）「現代社会と教育問題」（2021 年 11 月 9 日）の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー（松倉由紀氏：（株）ax-factory 代表取締役）の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である鈴木風優斗さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

２．ゲストティーチャーの話

（１）自己紹介

【ゲスト】松倉と申します。仕事としては、キャリア教育コーディネーター、教育研修プランナーをしています。出身が上田市、上田高校出身なのですけれども、実は私の父親や父方の叔父がなぜかみんな信州大学出身で、すごく地元で馴染みがある大学だなと思って、今日は参加をさせていただいています。ちなみに中学校から大学まで、ずっと吹奏楽をやっていまして、今は教育の仕事もしながらグラフィックデザイナーも目指しています。例えば、カードゲームなども自分で作って売ったりしています。

今日、荒井先生からいただいているテーマが「キャリア」と向き合うということですが、グサッと刺さるテーマだと思いました。

なぜ「教育」と関わろうとするのかが向き合いポイントではないかと思っています。

（２）キャリア教育コーディネーター

最初に、私が何をやっているのかご紹介したいと思います。簡単に言うと、地域と産業界の間にいます。テーマは「キャリア教育コーディネーター」ということで分野・領域としてはキャリア教育になるのですが、間を繋ぎながらキャリア教育の実践をサポートしている仕事になります。

では、お客様は誰かというと、この仕事は色々な方向を向いて仕事をしなければならないところがあって、それが特徴的だなと思っています。もちろん最終的なお客

様は子どもたちですし、学校、先生、その背景にいる教育委員会や行政機関もお客様です。もう一つ、お客様として大事なのは地域や産業界という全く違う方向を向いている人たちがお客様です。全く違う方向を向いている人たちなので、この人たちに何を提供しているのかも全く方向が違っています。

子どもたちには、先生方も一緒だと思いますが、いい授業をやるというところがポイントですね。社会と教科、科目とかの学びがつながる、繋がっているのがどう繋がっているのかがわかる授業や、教材を先生たちと一緒に作るお手伝いをしています。

また、先生や学校に対しては地域や企業との繋がりを作ったり、授業をつくるところのサポートをしています。地域や産業界、特に企業となると、CSR、社会貢献活動の戦略を一緒に立てることをやったり、企業が持っている教育資源を発掘したり、広報や PR のお手伝いをしています。私はこの中で特に教材を作ったり、プログラムを作ったりすることが一番好きです。学校と企業との間の役割としては、企業や産業界が持っている教育資源のどの部分が子どもたちにとって価値があるか、学びの材料になるのかを教育プログラムという形で、教育課程との接点としてつなぎ、翻訳して伝えていくことをしています。

（３）キャリアの変遷

【ゲスト】今はこのような仕事をしているのですが、では私がそこに出会うまで、大学生の頃に遡ってお話をしたいと思います。

私が大学生の頃ですが、今思うと、大分おかしな変人大学生だったなと思います。今お見せしているこの写真、インドネシアの木彫りの猿なのですが、博物館のミュージアムショップで見つけて、あまりにこれが好きすぎてなんとか持ち歩けないかと考えた結果、紐をかけて常に歩いているというすごいおかしな大学生でした。私は楽しくてしょうがなかったのですけど、周りから見たら猿を首から掛けている奴という大学生だったと思います。とにかく吹奏楽しかやっていなくて、他にはコピーライター講座みたいな広告を作ってみたいと思って、静岡にいたのですけれども、週に 2 回、東京のコピーライター講座に通うためにバイトするといった変わったことをやっていました。これだけ変わっていたので、やっぱり就活は波に乗れなくて、なんか広告クリエイティブには興味があるけど、就活そのものが全くピンとこなくて、別に仕事したくない訳ではないけれども都会で働くイメージもないし、とりあえず地元に帰ろうかなと思ってあんまり就職活動もせず、内定が出たところに就職しちゃえということで、長野のスーパーマーケットに就職しました。長野に本社がある会社だったのですが、半年で退職しています。地元の企業だったので結構堅くて、ちゃんと制服を着ないといけなかったのですね。ほんとにお茶汲みコピーみたいな事務で、結局半年で退職してしまいまして、たまたま拾ってもらったところが大手通信教育の会社ベネッセだったのです。当時からクリエイティブには興味があったので、制作部門に行きたかったのですが、配属されたのが赤ペン先生の採用と研修をする部署

というすごくニッチな部署でした。ただやってみたら楽しかったのですね。もともとやってみたかったのは広告クリエイティブだったのですけれども、人材育成の観点で授業や研修の場でみんなが分かる、やる気を持ってもらうために経験や知識をどう組み合わせたらいいのか、どう時間をつくったらいいのかを考えるので、結局どっちもコミュニケーションで、どちらもすごいクリエイティブだとわかってきました。そして、8 年半後に人事の仕事に転職しようと決めました。ここがキャリア教育に、学校教育に関わろうと思ったきっかけだったのですが、入った会社で新入社員の研修を担当することになりまして、ちょうど私が進研ゼミの仕事をしていた頃に中学生だった人が新入社員として入社してくる年でした。

すごくびっくりした一言が「自由に席に座っていいよ」って言ったら、一番元気のいい女の子が「はい」と手を挙げて、「席決めて貰わないと困ります」と言われたことだったのですね。この年の新入社員のみんなはすごい良い子たちでした。指示したことはきっちりできる、ただ逆に言うと、指示がないことは全くできない子たちで、「あれ、これでよかったのだっけ」という疑問に辿り着きました。

「私が進研ゼミで仕事をしていた時にお客様だった人が社会に出たらこうなっちゃう、本当にこれでよかったのか」と。子どもの未来、子どもの教育に関わることは、未来の自分の同僚を育てる仕事だったと思うのです。それがちゃんと未来の同僚を育てるために仕事をしていましたかと問いかけた時に自信を持ってイエスと言えない自分がいたところに、「あれ、これでよかったんだっけ」という疑問を持ちました。これがキャリア教育に関わるきっかけです。

これが 2008 年、今から 13 年前だったのですが、当時の経済産業省が「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」というものをやっていて、全国 28 地域でそれぞれの地域の特性を生かしたプログラムを作ろうという活動をしていました。「キャリア教育ガイドブック」に掲載されている全国 28 のキャリア教育団体があったのですが、その中で東京にある団体に色々問い合わせをしてそこに載っていた小さなコンサルティング会社に転職することになりました。ここでは「jobjob」という、職場体験の内容を中学校自身がフリーペーパーにまとめる仕事をやっていました。中学生が編集方針を話し合って決めて、デザイナーさんにデザイン依頼をするというものです。そして、デザイナーさんがそんなのだめだよとダメ出しする面白い企画でした。

（4）誤解されている学校教育

【ゲスト】ここからが今日の本題です。学校教育は誤解されまくり、というものです。2008 年に経済産業省の授業を一つ担当することになりました。「キャリア教育民間コーディネーター育成評価システム開発事業」ということで経済産業省が 3 年間、地域自立民間活用型キャリア教育のプログラムをやってきましたが、これを定着させるコーディネーターが必要ということで、コーディネーターをどうやって育てて、

キャリア教育を定着させていったらいいのかを考える事業でした。評価と育成の仕組みを作るということで、当時は全国 8 地域色々なところが動いていましたが、そもそも「キャリア教育コーディネーター」とは何をする人なのかという基本機能の整理をして、さらに、モデルプログラムを作成しようということで、座学だけなく実践活動も必要ということで、座学の場合どのような知識を学ぶ必要があるのかという研修項目の整理をしました。その後、全国共通の認定試験をやる形で運用されていくことになりました。ただこの形に辿り着くまでに全国各地で本当に色々なことがありました。まず国の事業なので、「プレ開講」ということで無料で開講してみてプログラムが本当に機能するかを試行しました。そうすると色々な人が集まってきます。大概は学校教育に興味がある方がくるのですが、どんな人たちが来るかというと、ちょっと嫌な感じなのですね。「学校の先生は本当にダメだよ」、「社会人がもっと入って社会人が教えた方が良いのではないか」と言い始めたりとか。あと、ディスカッションをさせると、とにかく学校の悪口大会になる、みたいな。本当にこの人たち迷惑だなって思いました。問題意識があるのはわかりますが、こんな人たちを学校に連れて行ったら、学校の先生は嫌な気持ちになりますよね。全国各地で同じことが起きていました。学校は社会から見たらこう見えているんです、学校の先生は社会のことを知らないよ、学校の常識は社会の非常識、皆さん、どう思いますか。

だけどこれ学校に限った話ではないのですよね。例えば、特定の企業にしかいない人はそこしか知らないし、特定の企業の常識は他の企業の非常識みたいなことがあるのに、なぜ学校の先生だけが批判されるのか、すごく疑問に思いました。私なりの解釈としては、一つはマスコミの報道の影響がすごく大きいことがわかりました。話題になるのは不祥事が起きたときっていうのがどうしてもありますよね。あと、学校教育に対して批判的な報道がすごく多いですよね。それが報道の役割なので仕方ないのですが。もう一つは誰もが学校に行ったことがあったり、関わりを持ったことがあるところが実は大きな落とし穴だなということがわかりました。学校に関わる切り口って児童・生徒が子どもとして自分が学校に行くっていう経験か、保護者の方が PTA として関わるとか、子どもを通してそこの学校を見るってところだけなのですけども、実は学校を取り巻くものはもっと色々ありますよね。教育行政の仕組みや学習指導要領など。あと学校の先生でも先生以外の顔がありますよね。「先生だって一人の人間だから、人生があるでしょ」といったところが全く見えていないのですが、見えないということに気づきにくいのですね。ですから、自分が知っている学校を子どもとしてみた学校とか、保護者としてみた学校というところだけで判断してしまいがちです。

そこで、学校の先生とか、味方をどうやって増やしたら良いのだろうということを始めていくことになります。私は、学校の先生は本当にすごい人たち、本当にリスペクトに値する人たちだと思っています。特に小学校だと毎日朝から帰りまで子どもと一緒にいるというところも本当凄い、

私にはできないなと思うし、あとやっぱり誰よりも子どもたちのことを見ていて知っているというところが本当にすごいなと思います。

中学校の先生と話をしていると、やっぱり生徒のことが話題になるシーンがすごく多くて、そうすると「あの子はこんな子でねとかこんなことが得意で、でもここがちょっと苦手なのよ」みたいな話をたくさんしてくださる。そして、その話をしている姿が、もう本当に嬉しそうで楽しそうだし、子どもたちと相対しているときとか保護者対応しているときでは多分こんな顔見せないだろうなっていうような、本当に楽しそうに話をしてくださるのですね。なので、最終的に子どもたちに何が必要なのか、もっと細かく言えば、うちの学校やうちの子のクラスの子たちに今何が必要なのかというのを判断できるのはやっぱり先生しかいない。逆に言ったら、そんな私達のような外野の人間が「これが必要だよ、あれが必要だよ」なんて多分おこがましい話なのだろうなと思います。

（５）キャリア教育コーディネーター養成講座

こんな形で 2011 年から自主事業という形で「キャリア教育コーディネーター」の養成講座を開講しています。座学の 30 時間はテキストも使った自宅学習があったり、集合型の研修でワークショップをやったり、提出課題をやったりと、ちょっとハードな内容になっています。ポイントの一つは、正しい知識を持ってくださいということです。みんなが知っている学校は断片的なものですし、おそらく誤解もしているので、正しい知識を持って欲しいこと、それと、味方としてのマインドを身につけてほしいという想いを持っています。それから自分自身が学校教育に関わるにあたって、何か役に立つ教育資源になることがありますよということ、もう一つはとにかく学校の先生のことを先入観なしに知ってくださいということです。

「おそらく外にいる私たちにしかできないこともあるだろう」ということで、「できることから関われたらみんな楽しく関われるよね」と、「眉間にしわが寄ったこうしなきゃいけないよね」みたいな怖い大人ではなくて、「こんなことができたらワクワクするよねっていう大人が学校にいてくれたら楽しいよね」っていうことで自分たちもできることを探しましょうということをやっています。

他のポイントとしては、「自分の思う通りに子どもをコントロールしようとしてないですか」という投げかけをしています。実は私もやっていてすごく思うのは、「教育」と「宗教」は紙一重だなと思って、やろうと思えばマインドコントロールできちゃいますね。しかしそれをやるかどうかは自分の教授次第ですよね。

あとは自分が学校に行ってすごいとか賞賛されるためにやっていたりしませんかという投げかけです。ただ学校はあなたのための場じゃないということです。結構こういうことが問われるので、やりたいきっかけは自己満足でもいいですが、それだけじゃ駄目で、自分がワクワクするポイントはどこかをきちんと自覚してないと、こういう間違いが起きちゃうことが怖いと

ころです。最終的には「本当に自分の生きる姿とかその背中を堂々と子どもたちに見せられる大人でいますか」ということがものすごく問われます。

皆さんも、私も含めてなのですが、なぜ教育と関わろうとしているのか、やはり向き合い続けていきたいところだと感じています。

（６）質疑応答

【参加者】「学校の学び」が具体的に社会でどのように生かされるかを学ぶ機会がないため、一般企業や外部の人が、実際学校に足を踏み入れて活動されているのがとても素晴らしいことだなと感じました。

【参加者】聞いていて本当に面白いなと思いましたが、やっぱり一番最後のどうして教育に関わるのかという問いがすごく心に刺さりました。私は中学の頃から教員になりたいと思っていますし、教員になりたいと思ったきっかけもちゃんとあるのですが、どうしてなのかをもう一度ちゃんと考えたいと思いました。

【参加者】最後の教育に向き合う理由について、多くの人が実はそこを考えているのかな、色々な選択肢がある中で、なんとなく教師にといった人も一定数いると感じました。私はどちらかというと、最初の入り口は、何かを教えるのが楽しかったから、その選択肢の中で、企業に入って新人に教えることでもいいのですが、それは自分の能力がある程度育ってからではないとできないかと思い、一番長くそのことを楽しめる職業として教員を考えています。

【参加者】「教える」ことについてトレーニングを受けていない中で、社員に何かを伝えることについて、苦労はありましたか。

【ゲスト】そうですね、多分「教える」って要素が 2 つあると思っています。一つは、その内容について熟知している必要があるということ、もう一つは、教え方について技術があることですね。

私は別に何かそこに行こうと思って行ったわけではなく、ポンと配属されたので、やるしかないところが正直ありました。

内容については、最初に配属されたときは、高校講座の国語の担当だったのです。なので、受験国語をもう 1 回やり直す勉強はとにかくしなきゃいけないといった点はありました。

あと教え方に関しては、先輩たちがそれなりにノウハウを持っていますよね。それをどれだけ盗むかというところもあるし、先輩たちと一緒に仕事する中で教えてもらったりとかしました。これは学校の先生でも一緒だと思います。正直、大学卒業して社会に出てからの方が勉強しなくてはいけないことが何倍もあると実感しています。

【参加者】「仕事」に対してそもそも嫌悪感のある学生がいた場合はどうしますか。

【ゲスト】実は私はあんまり人と関わりたくないタイプです。大人になったら何とかなっているみたいなところはあるかもしれません。ただ私はそういう子はいると思

っていますし、むしろいていいと思います。それも個性だと思っていますし、それを駄目だというキャリア教育にしたくないと思っています。だから、なるべく色々なゲスト講師だったり色々な企業、色々なタイプの人に子どもたちが出会えるようにしたいと思っています。

【参加者】大人が大人を変えることは本当に難しいことだと思いますが、どのような工夫をされているのでしょうか。

【ゲスト】人を集める時点で、実はふるいにかけている部分はあります。ただ自分が嫌いにならないようにすることについては気を遣っています。私もそうだし今ここにいる皆さんもそうですが、どんな人でもその人の中にキラキラしているものがあって、それが世の中の役に立ったら社会も自分も幸せになるじゃないですか。だから、何か尊敬できるところとかその人がそこに至るにあたって何があったのといったポイントをちゃんと認めていくことはすごく大事だと思うのです。

最後に皆さんへのメッセージとしては、「たくさん悩んで下さい」ということをお伝えしたいです。

私も自分の生き方や働き方・仕事の内容に本当に納得がいったのは、実は36歳になってやっと納得できたという感じで、そこまでずっと悩み続けていたんです。みなさんもこの先悩み続けるのかと思うと辛いかもしれないですが、別に大学卒業で全てを決めなくてはならないことではないと思います。人が嫌いな方は自分の好きなことを極めていただくといいと思います。自然とそこに人が寄ってくるので、何とか仕事は成り立ちます。